

# ひょうごの遺跡

平成6年12月1日発行  
兵庫県教育委員会  
埋蔵文化財調査事務所  
神戸市兵庫区荒田町2-1-5  
☎652 TEL078-531-7011  
FAX078-531-7014

特集：新旧山陽道沿いの遺跡をたずねて

## 古代人の墓地

——おいちなか姫路市太市中古墳群——

太市中古墳群は姫路市の西端に近く、JR姫新線の太市駅から約1km南にあります。兵庫県教育委員会では、山陽自動車道と太子・龍野バイパスを結ぶ、姫路西バイパスという道路の建設に先立ち、昨年度

から発掘調査を行っています。

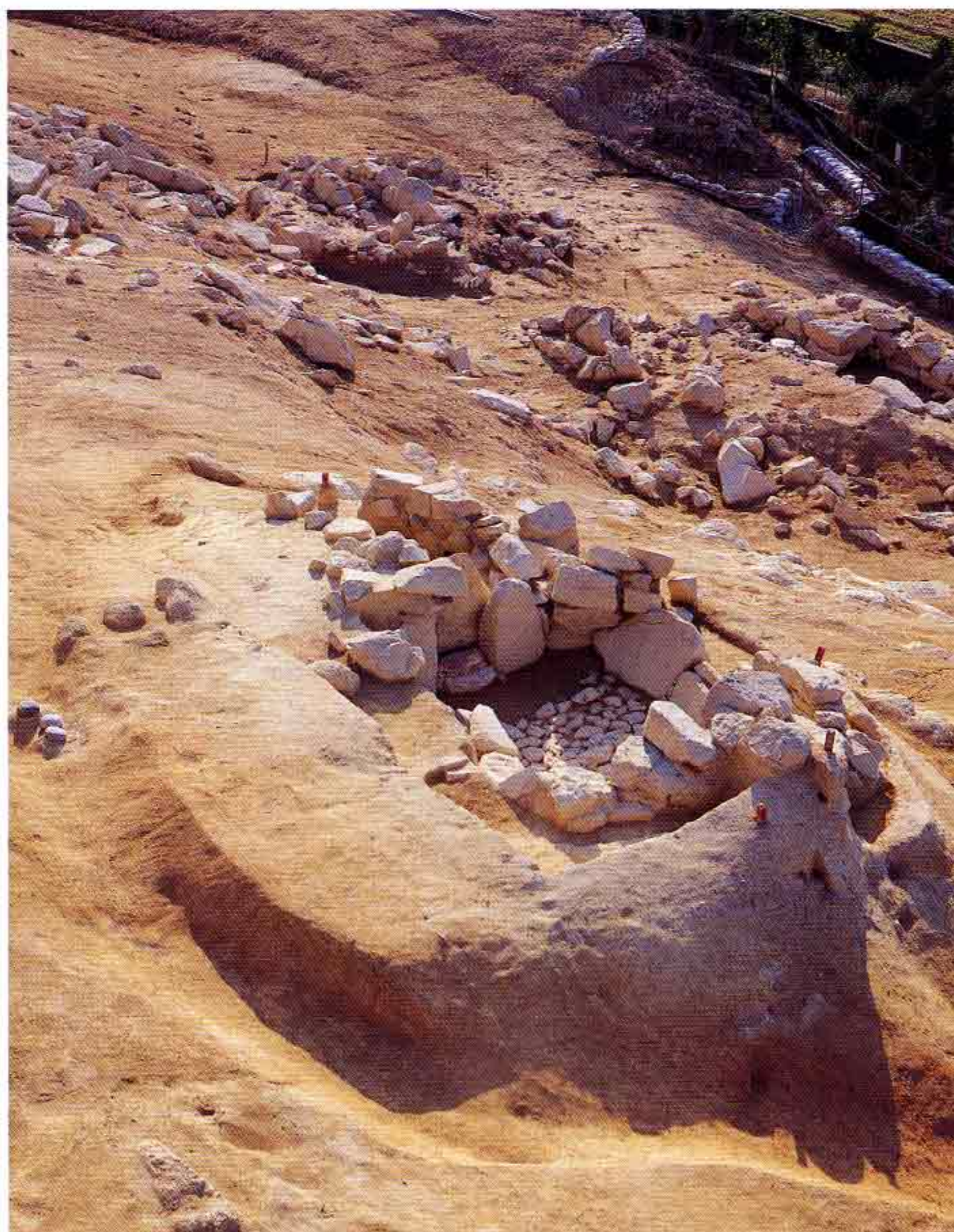
調査前は山林でしたが、古墳の盛り土がいくつかの小山のように見えていて、古墳があったことは以前から知られていました。今回の調査地区内では、

今から約1400年前（6世紀中頃～7世紀）の古墳を13基確認しました。大きさは様々ですが、すべての古墳に、横穴式石室と呼ばれる石組みの部屋が設けられていました。

この太市中古墳群は岩だらけのゴツゴツした山の急斜面につくられています。このような地形は山崩れが起きやすく、古墳をつくるにはあまり適当ではありません。発掘した古墳も土砂崩れで盛り土が流されたり、石室がゆがんだりしていました。これほどの急斜面に古墳をつくるのは、当時の人々にとって大変なことだったでしょう。

今回の調査では、4号墳から九州北部地方の影響を受けた横穴式石室が見つかるなど、大きな発見がありました。この地域のことは『播磨国風土記』にも記されており、古くから開けた土地柄だったようです。

まだ調査中ですが、次のページで成果の一部をご紹介します。



太市中古墳群全景（手前が4号墳）



## 太市中 4 号墳

古墳群の中で最も早い時期に、しかも最も高い場所につくられた古墳です。この古墳の横穴式石室は周りの古墳とは少し違った特徴を持っています。

1. 玄室<sup>げんしつ</sup>が正方形に近い。
2. 玄室の壁は下の方に大きな石を立て、上には小さな石を積み上げる。
3. 玄室入り口の両側に石を立てて袖とし、その間に板石を立てて中をふさぐ。
4. 羨道<sup>せんどう</sup>は入り口から玄室にむかってだんだん低くなり、玄室の床でさらに一段下がる。



4 号墳石室内部

4 号墳のこのような特徴は、九州北部地方の横穴式石室に共通したところがあり、太市中古墳群に横穴式石室がつけられるようになったきっかけが九州の人々との交流にあったり、また、葬られた人々の出身に関係があるのかもしれません。

付近で同じような特徴を持つ古墳は、姫路市<sup>よろ</sup>古墳群第3次調査1号墳・2号墳などが知られています。



6 号墳石室内部

## 太市中 6 号墳

今回調査した中で最も大きな横穴式石室をもつ古墳です。天井の石が持ち去られて、古墳の造られた当時の全体の様子はわかりませんが、当時の古墳としては、かなり大きなものだったのでしょうか。石室の入り口は人の頭ほどの石を積んでふさぎ、外からは簡単に入れないような工夫がされていました。

石室の中は古墳がつけられた後に荒らされ、副葬品の一部が失われていましたが、馬に乗るときの道具（馬具）や土器・装飾用の玉など、数多くの副葬品が発見されました。



10号墳遺物出土状況

## 横穴式石室とは？

古墳の内部にある「大小さまざまな石を積み上げてつくった、棺をおさめるための部屋」のことです。入り口を開閉して何回も使うことができ、古墳時代の中頃から終わりにかけて全国の古墳に数多くつくられました。石室は片側に入り口があって、横に伸びています。「どうくつ」をイメージするとわかりやすいかもしれません。

入り口からはいると、通路「羨道<sup>せんどう</sup>」が続き、奥に広がった部屋「玄室<sup>げんしつ</sup>」があります。この部屋に死者の棺をおさめます。石室によっては通路と部屋の幅がほとんど変わらないものもありますが、多くのものは通路の幅より部屋の幅（両側または片側）を広くして、通路と部屋を区別しています。部屋の広がった部分を「袖<sup>そで</sup>」と呼びます。羨道・玄室の上には大きな石で天井をつくり、石室全体を覆うように土を盛って墳丘を築きます。



## 山陽自動車道建設で 見つかった窯跡

兵庫県では古代から日常生活に使う土器や、屋根瓦などを焼いた窯跡がたくさんあります。なかでも多紀郡今田町を中心とした「丹波焼」は現在まで続く、兵庫県を代表する「やきもの」です。

兵庫県教育委員会では、現在建設が進められている山陽自動車道建設（一部は開通）に先立ち、発掘調査を行っています。多くの古代の窯跡が発見されています。今回、その一部を紹介したいと思います。

兵庫県内で山陽自動車道の路線内に存在する窯跡はいくつもありますが、大きく5つの地域にまとめることができそうです。西から、緑ヶ丘・大陣原（相生市・龍野市）・志方（加古川市）・白沢（加古川市）・久留美（三木市）・小名田（神戸市北区）の5カ所です。

### みどりがおか 緑ヶ丘窯跡群・おおじんばら 大陣原窯跡群

相生市周辺には古墳時代から平安時代後期にかけて、須恵器を焼いた窯跡が130基あまり発見され、「相生窯跡群」と総称されています。



緑ヶ丘2号窯

#### 緑ヶ丘2号窯

窯の本体（窯体）のほとんどが地上につくられた窯のようです。皿や碗などの日常雑器類を製作していました。平安時代中頃のものです。

#### 大陣原3号窯

斜面につくられた窯跡で、須恵器と瓦を焼成していたようです。窯体は長さ8mで床面は30度以上の急傾斜です。須恵器は碗を中心に、皿・壺・鉢などを生産していました。平安時代末頃のものです。

#### 大陣原4号窯

土器を焼いた窯跡ではなく、「はくたんしょうせいすみがま 白炭焼成炭窯」と呼ばれる「炭焼き窯」で、窯体に8個の横口をもちます。俗に「八つ目うなぎ」と呼ばれています。斜面

に位置し、窯体は約10m、等高線方向にほぼ平行につくられ、谷側に作業面と焚口、山側に煙出しがついています。遺物は出土していませんが、7世紀頃の窯と考えられます。



大陣原4号窯

### しかた 志方窯跡群

今年度調査を行っているのは、中谷1号窯～3号窯です。いずれも平安時代前期のものです。



中谷1号窯

#### 中谷1号窯～3号窯

平安時代前期の窯跡で、どちらも現存の長さは約7m、幅は約1.5mあります。出土した土器は、1号窯は須恵器の杯や台の付いた杯です。3号窯も須恵器の甕・杯です。1号窯の窯の内部では杯を裏返しに置いて、土器を焼く時の台（焼台）にしています。



中谷3号窯

### しらさわ 白沢窯跡群

奈良時代の須恵器の窯跡が数基確認されています。なかでも白沢5号窯跡からは陶製の「人形（ひとがた）」が発見され、以前『ひょうごの遺跡15号』で紹介しました。











## く る み やなだに 久留美（柳谷）窯跡群

三木市内には50基あまりの窯跡がありますが、そのほとんどが平安時代後期の瓦陶兼業窯（須恵器と瓦を同時に焼いた窯）で、ここで焼かれた瓦が、平安京に造営された寺院や鳥羽離宮の建物に使われていたことがわかっています。

### 久留美柳谷10号窯

平安時代後期の瓦陶兼業窯です。窯の残存する長さは4.6m、幅1.5mで、窯の内部には瓦を並べた数列の段がつくられていました。



久留美柳谷10号窯



久留美柳谷15号窯

### 久留美柳谷15号窯

これも平安時代後期の瓦陶兼業窯です。調査の結果、この窯は窯体の規模を小さくするような作り替えが行われていることが判明しました。

## お なだ 小名田窯跡群

昨年度の調査では、2基の窯跡を発掘調査しました。鎌倉時代前半（13世紀）の須恵器を焼いた窯跡のようです。焼け損じた須恵器を捨てた部分（灰原）からは、コンテナ700箱分の土器が出土しました。

## お 便 り コ ー ナ ー

平成6年6月、ここ埋蔵文化財調査事務所に神戸市立本山第三小学校の児童のみなさんが訪ねてこられました。後日、児童のみなさんが私たちに感想文を送って下さったので、ここにその一部をご紹介します。

一番心に残ったのは、土器のことだった。その中でもいっぱいかけらがある中から選び出し、組み立てていくのがとても大変そうだった。それとせっこうでうめたところを色をにせてぬるのもむずかしそうだった。（A男君）

私は、兵庫県だけでもこんなに遺跡があるとは思わなかったのでびっくりしました。（B子さん）

木ぐつ（靴）というのがあったけど、30センチぐらいありました。だから、昔の人はみんな足がおおきかったのかなあと思いました。（C子さん）

人骨や土人形や祭祀具やつばなどたくさんのもがありました。その中には、アクセサリーもあり

ました。人間は昔からおしゃれなんだなと思いました。アクセサリーはどんな人がつけていたのかしらべてみたいなと思いました。（D子さん）

私は、はっきりいってみなさんの所へ来るまでは歴史が大キライでした。だけどみなさんの所へ行ってから大好きになりました。私もこれからたくさん勉強して、歴史のなかにのこれるようなステキなひとになれるようがんばります。（E子さん）

学校では「この時代にこんな道具が使われていた」と聞くのですが、わかったような、わかってないような、そんな気持ちでした。だから事務所で（実物を）見せていただき、とてもよくわかりました。（F子さん）



## 歩いてみよう山陽道

昔の山陽道はいったいどのような道だったのでしょうか？

奈良時代（今から約1300年前）わが国では、都を奈良の平城京におき、律令国家を確立していきました。そのため、中央と地方を緊密にむすぶための道路整備が必要になり、東海道・東山道・北陸道・山陽道・山陰道・南海道・西海道の七つの道路を整えました。

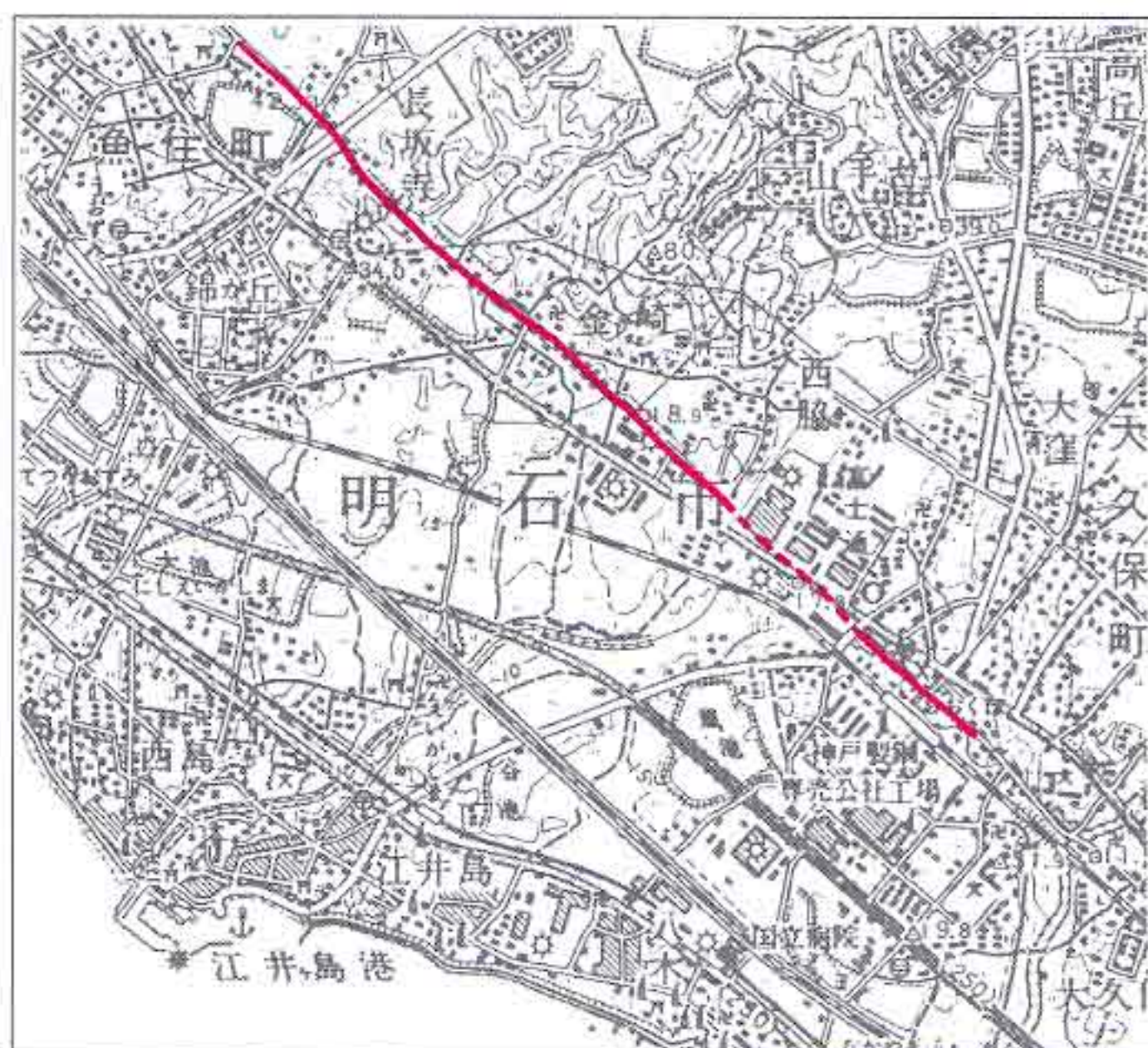
その中で山陽道は、都と海外との玄関口であった北九州とを結ぶ最も重要な道路でした。

そこで『ひょうごの遺跡』編集部では、山陽道が現在どのように残っているのかを調べつつ歩いてみました。

今回訪ねたところは明石市大久保町から魚住町までの3.5km区間です。JR山陽本線大久保駅前の道路を北に向かって進み、2つ目の小さな交差点で東西



山陽道の町並み（魚住町付近）



今回歩いた「山陽道」

に通る道が古代山陽道です。今回はここからが旅のスタートです。西に向かって歩いていくと、国道2号線にぶつかり交差します。その先は現在工場の敷地内となって、一部の区間が消滅しています。

再び復活した山陽道を進んでいくと、北側に金ヶ崎神社の鳥居が見えてきます。そこから長坂寺まではなかば埋もれかけた道標<sup>どうひょう</sup>があったり、古い町並みが残っていたりします。



邑美駅家（おうみのうまや）推定地

長いゆるやかな坂道を登りつめたところが長坂寺遺跡<sup>ちょうはんじ</sup>で、古代山陽道の邑美駅家（おうみのうまや）の推定地です。駅家（うまや）とは街道の馬の乗り換え場所で、古代の役人はここで馬を乗り換えさらに西へ東へと旅をつづけました。現在では民家と畑地になっていて、駅家のおもかげは残っていませんでした。そこから西は田園風景が続き、明石市立魚住小学校前まで歩きました。なお、県の発掘調査で出土した遺物を収蔵する施設も、この魚住にあります。山陽道はさらに西へ続きますが、今回の旅はここまでとします。

兵庫県内の山陽道沿いには現在でも多くの寺院・神社・古い道標などが残されています。また、兵庫県内には山陽道のほかにも山陰道（丹波・但馬）と南海道（淡路）もあります。みなさんも身近な古道をあるいてみませんか。



現在の山陽道（金ヶ崎大道池付近）



# 報 告 平成6年度特別展

## 米づくりの道具展

前号でお知らせしましたように、10月30日～11月13日までの15日間の日程で、平成6年度特別展『米づくりの道具展』を開催しました。

あまりにも身近すぎて軽視されがちだった「米」が昨年の不作以来急に脚光を浴びてきたようです。そのような訳で、今回は「米づくりにまつわる道具」の展示を行いました。

展示した遺物は、弥生時代・古墳時代から近世にかけての、米づくりに関係する出土品が中心でしたが、なかには最近まで使用されていた道具とほとんど変わらないものもあり、意外な驚きをもたれた方も多かったようです。

会期中には、テーマに関係した講演会や、発掘調査された遺跡のスライド解説会も催しました。講演会は愛媛大学教授 下條信行氏による『大陸系磨製石器の文化史』、静岡大学助教授 佐藤洋一郎氏による『稲のきた道』という内容で行い、会場となった研修室いっぱい（約150名）の方が熱心に耳を傾けてくださいました。

これからも埋蔵文化財について考える手だてとして、秋の特別展示を続けていきたいと思っておりますので、みなさんもぜひおいで下さい。



好評を得たポスター



展示室内の様子



講演会の開催



### 編集後記

今回の『ひょうごの遺跡』では、山陽自動車道沿いで発見された遺跡について特集を組んでみました。高速道路の下には、たくさんの遺跡が存在していたことがおわかりになったことと思います。◇編集部では、古代の「山陽道」の跡を歩いてみました。現在の国道2号線に比べ大変静かで、自然がたくさん残っていることを実感しました。みなさんもお近所の「古道」を自分の足で歩き、新たな発見を楽しんでください。◇お便りコーナーでは、埋蔵文化財調査事務所の展示を見学して頂いた小学生のみなさんの感想を載せる事ができました。皆さんからのお便りをお待ちしています。